

イタリア人から見た日本

スイス銀行東京支店長

ヴィットリオ・ヴォルピ

聞き手：佐多彦彦 株式会社東機質代表取締役社長

佐多：ご著書の『日本よ敵か味方かーイタリア人の見たニッポン』（日本経済評論社）では、経済問題を中心に、90年代の日本社会への積極的な提言がなされています。
ヴォルピ：もともとこの本はイタリア人に、日本と日本人を説明したいという動機で出版しました。イタリア人は日本について、ホンダ、ソニー、カワバタ、ミシマ程度の知識しかありません。日本経済の実態を歴史的制度的に分析解明して、理解と関心をもってもらおうとしたのです。「敵か味方か」といっても、日本はもちろん味方ですけど、上手に交際していくことはなかなか困難です。

佐多：確かにイタリアと日本では文化的な違いが大きいですね。

ヴォルピ：ローマの歴史家タキトゥスは、文化が変わるには何世紀もかかると言っています。私はいま、織田信長時代のイタリア人、ジョヴァンニ・ヴァリニャーノの研究をしているのですが、彼の著作の中でタキトゥスの言葉を再認識しています。

バリニャーノはポルトガルでイエズス会に入りゴアやマカオに住んでいたのですが、極東担当として、1578年に日本に来ました。彼はまず宣教師たちに、2年間で日本語をマスターする指示をしています。言葉が通じなければ、信者とのコミュニケーションができません。告白も受けられませんね。次にマーケット・ポジションの提起をします。フランシスコ会のように貧しい人々を中心に伝道するのではなく、大名をターゲットにすべきことを勧めています。それは日本がタテ（縦）社会だからです。大名が説得できれば、家臣をはじめ藩の多くの人々がキリシタンになることを見抜いていました。彼が来てから20年で、キリスト教信者が30万人程に増えています。その他、日本の社会でどのように振る舞うべきか、日本人とどのように付き合うべきかについて、膨大なメモを残しています。それは今も十分通用する。抜群です。



ヴィットリオ・ヴォルピ

Vittorio Volpi

1939年イタリア・ミラノ生まれ。72年、イタリア商業銀行日本支店開設のため来日。支店長として9年間勤めた後、81年、同行退社と同時に国際ビジネスコンサルタント会社・（株）パラレル設立。現在、スイス銀行東京支店長。上智大学講師。著書に『経済大国ニッポンに明日はあるのか』、『日本よ敵か味方か』など。帯日24年の知日家。イタリアでは日本問題の解説者として著名。

彼のジャパニーズ・メモを読むと、織田信長の時代から日本人の基本的なスタンスは変わっていないことが判ります。安全な共同社会、オンとギリの集団意識、外国人に対し非常に丁寧で敵対的でないこと、そして大変に好奇心が強いこと。バリニャーノは日本人の好奇心について書き残しています。世界のことは何でも知りたい人々、と。

佐多：それはいまでもですか？

ヴォルピ：いまでもです。実にcurious（好奇心旺盛）な方々です（笑）。イタリア人も、何世紀も変わっていません。例えば、イタリア人は政府を信じていません。歴史的にイタリアの政府は信頼に値しないからです（苦笑）。それは父から子へと伝わります。またイタリア人は外国人が好きです。それも伝統です。ローマ時代衰退期から、いわゆるバルバロイが沢山入り込みました。北欧から、ドイツから、英国から……。一般的なイタリア人は外国人に対し、いらっしやい、いらっしやいという基本姿勢を崩しません。

佐多：なるほど。ところで国際社会での日本の立場はいま、非常に難しいところに来ています。ある意味で文化的アイデンティティが問われていると思うのですが。

ヴォルピ：日本の生活様式はどんどん西洋化しています。しかし文化的な中核は変化を受け入れないですね。

VITALITE

インタビュー



国際化、国際化と言われていますが、言葉だけで、実際は何もしないのではありませんか？我々としては、本当に国際化して欲しいですよ。日本がよりグローバルな存在になるためには、もっとマーケットを解放しなければなりません。日本人の考え方がオープンになり、大学も外国人教授をもっと受け入れ、外国人学生に開かれたものにならないければ文化は変わりませんね。

世界的なプレーン、知恵や経験が集合し交換することの本当のメリットは、切磋琢磨することによって相互に強くなり進歩することです。それなしに日本がアメリカと肩をならべることはないでしょうね。世界で重要な地位に立ち、第二位にはつけても。

佐多：日本が世界のリーダーになることはない、と？

ヴォルピ：いくら経済や金融の力が強くても、はっきり言って無理でしょうね。それはグローバル・ビューがないからなのですね。日本人はしばしばあまりにも些細なことに気を奪われています。戦略的課題にとりくむ時には、先見の明がないと失敗します。

佐多：日本のシステムは人を幸せにしないと、オランダ人ジャーナリストのウルフレン氏が痛烈な批判をされていますね。

ヴォルピ：しかし、夜のバーや飲み屋さんではハッピーな人をたくさん見かけますよ（笑）。

新聞記者をしている妻と昨夜も話したのですが、彼女は日本人が非常に不幸だと言います。例えば日本人は会社第一主義で、休日も接待ゴルフで、妻はゴルフ未亡人です。イタリア人なら離婚ですね。家庭を大事にするからです。しかしこれは文化の違いです。違うから駄目、

となるとこれは、カルチャー・レイシズム（差別主義）ですね（笑）。非常にアブナイと思いますよ。確かに多くの西欧人は日本人が不幸だと言います。しかし異なる文化の中で成長した者は、簡単には判断できないと思うのです。私は日本人は「相対的に」幸せだと思いますよ。

日本の文化は素晴らしい。文化は美です。違いがあることは美しいことです。常に互いの文化を尊重しあい、寛大であることが世界市民の第一歩です。“郷に入りては郷に従え”ですよ。

佐多：日本が変わるには外圧が必要という意見も多いですが。

ヴォルピ：「黒船」による外圧は、あるいはいまでも有効かもしれません。

しかし、日本は実にコントラストに満ちた国で、良き世界市民というべき経済人もいるのです。我々ヨーロッパとしても、日本を知り、日本人と適切な対話を行えるように努力する必要があります。日本人の「ホンネ」と「タテマエ」、すなわち現実と口実（ノ）を区別し、日本人がいわゆる“（鎖国的な）日本人であること”を超越していく姿勢をもつならば、その姿を大きな関心をもって見守り、勉強すべきです。

佐多：具体的に、10年、15年後の日本はどうなっているとお考えですか。

ヴォルピ：ますます西欧化が進み、価値観もじょじょに集団主義、会社第一主義から個人主義になっていくと思います。失業率も今は3%くらいですが、5~6%くらいになって、貧富の差が拡大し、犯罪も増えていくのではないのでしょうか。円安も、1ドル150円程度になるんじゃないかと思います。

佐多：それで日本はやって行けますか。

ヴォルピ：やって行けるんじゃないですか。かつて円高で1ドル80円になったとき、日本は倒産すると言われてました。しかし、今年上場している会社は純利益が15%ですよ。日本人ほど柔軟性のある人々はいません。外から見るとかなり堅牢なようですが、実は非常に实际的で柔軟です。日本人は知らないことについては弱いのですが、問題が明らかになった時、すごくefficient（有効）な結論を出します。そして結論を出してからは非常に有能ですね。ですから、時間があればたいいのことはうまくやっていけると思います。